

世界の軍事博物館と記念艦(2)

——「三笠」を考える——

平 間 洋 一

中国の戦争記念館

中国では人民解放軍軍事博物館と日中戦争の起点ともなった蘆溝橋にある中国人民抗日戦争記念館を訪れたが、大きなショックは人民解放軍軍事博物館で、スターリンの極大の肖像画が、博物館入り口正面のホールに、毛沢東の肖像画とともに鎮座していたことであった。——スターリンの母国では犯罪人として銅像が引き倒されているというのに。——

私は入口正面に飾られたこの巨大なスターリンの肖像画を眺めて、中

国の共産主義に対する評価、姿勢を
実地に理解することができた。

また見学を通じて感じた第二点は、日本の脅威の過大な強調で、人民解放軍軍事博物館には白髪三千丈の表現からか、南京では三〇万人が虐殺されたと日本軍の圧政を大きく展示していたが、日本人を装って中国人自身が行ったといわれている黄河や揚子江上流での海賊の略奪まで、倭寇の行為として展示していたことは全く驚いた。

この倭寇の被害の過大展示を日本に対する被害妄想と見るべきか。そ

れとも国民の国防意識向上を狙ったものとみるべきであろうか。

この対日被害妄想は侵略の苦しみを受けた国民でなければ理解できないというのかもしれない。

しかし、私はこれを中国人の被害妄想症候群と見たい。紀元前三世紀の秦の始皇帝から一九世紀の明朝まで、二〇〇〇年にわたって築かれた国境沿いの六〇〇〇軒に及ぶ万里の長城を訪れ、さらに高い城壁に囲まれた北京、高い壁に囲まれた中国人の家を見て、中国人の異民族に支配されてきた過去の歴史体験が、このような過大な対日恐怖となったのかもしれないと思った。

しかし僻んだ見方をすれば、対日戦争を大きく展示するのは人民解放軍の功績を国民に知らせ、称えさせる必要がある。言葉を変えらば国民が人民解放軍を称えず、むしろ軽視しているからではないであろう



日中事変 作戦経過図

「三笠」の復元

このような世界の軍事博物館や記

念艦と異なり、日本の軍事博物館や記念艦に対する対応は異常であった。昭和20年8月15日の敗戦とともに、

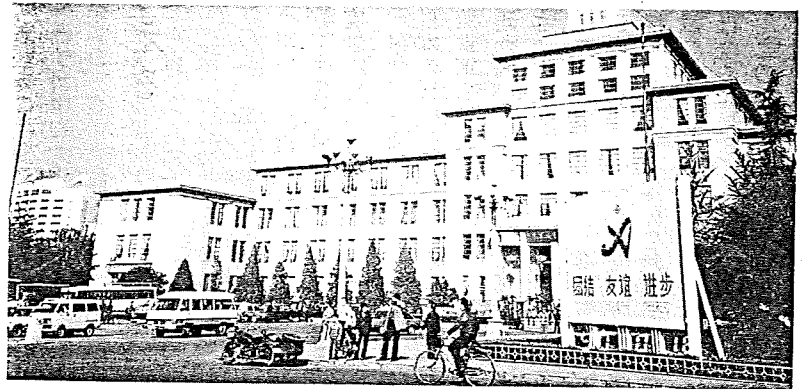
軍人にすべての責任が転化され、過去の歴史が否定された。かつて祖国の独立を守った栄光に輝く「三笠」は上部構造物、内装を撤去され、日本がその後、エコマック・アニマルと世界から侮蔑されるのを予言するかのよう、金もうけのための道具として占領軍のためのダンスホール「MIKASA」へと変身した。

しかし、それから数年後に「三笠」を建造したイギリスの一市民から、国家の危機を救った「三笠」に対する非礼を論され、さらに日本海軍を敗ったかつての敵将ニミッツ元帥の援助（「文芸春秋」に「三笠」の復元のための拠金を日本人に呼びかけた文の稿料を寄贈）が契機となって復元された。

しかし、日本における「三笠」を取り巻く環境は、今はなき共産主義国家の対応と変わらぬ影響

か。平和が続く長年にわたり特権を保有して腐敗し、人民解放軍の人氣が下がれば下がるほど、日本帝国主義の圧政を解放した人民解放軍の功績を国民に知らせる必要がある。人民解放軍への国民の敬意と支持が下がれば下がるほど、人民解放軍は日中の不幸な歴史を国民に知らせ、このような虐殺から人民を救ったことを宣伝し、低下しつつある解放軍の地位を高める必要があるのではないであろうか。

蘆溝橋の抗日戦争記念館を訪れたが、それは見上げるばかり立派な建築物であった。外貨もないのに大金を投じて日本製の大型ビデオを装備したビデオ劇場や最新の技術を日本から導入して蘆溝橋事件の大パノラマを整備するのは、このような人民解放軍の存在、功績の誇示にあるように思われた。



中国人民解放軍軍事博物館 建物正面（上）と展示写真（下）



を強く受けているように思われる。

本年6月、「三笠」はイギリスのフリーリップ殿下が総裁で、国際的にも評価の高い世界船舶財団から国際海事遺産賞を受賞した。歴史を知る者には、教科書に東郷平八郎元帥の名前が登場したと合わせ、国際海事遺産賞の受賞は二重の喜びであり、これは「三笠」にとり、さらに日本にとり大きな意義があった。

特に現在までの受賞艦船7隻中、「三笠」と「コンスタンチューション」だけが技術的遺産としての価値に加え、祖国の独立を守り祖国に栄光をもたらした記念艦であるということからも、「三笠」は名実ともに世界に誇り得る国家的財産と世界から評価されたともいえよう。

しかし、この輝かしい「三笠」の受賞を日本の新聞は一切報道しなかった（一部の地方版を除き）。

「三笠」を考える

このような歴史感覚のない日本の国民を背景とする「三笠」であるがため、外国の記念艦と同列には論じられないが、世界の受賞艦と大きく異なり、また、大きく劣る点は、いずれの記念艦も食堂の食器から病室の医療機材、機械室の各種機械類、そして当時の食料さえロウなどで再現し、往時の状況を極めて忠実に復元していることである。

「三笠」が受賞したのは建造技術上、現存する最後の下級以前の戦艦として、またレシプロ・エンジンを装備した最後の大型艦としての造船技術上の価値が歴史的遺産として評価されたとのことであった。しかし、「三笠」のレシプロ・エンジンは撤去され機械室はない。

また、外国の記念艦との相違の第一は同艦が博物館を兼用し、さらに

現代の陸海空三自衛隊の展示室まで設けているため、すべてが中途半端となつて「夜店の展示」と変わらないうことである。

これに比べ各国の記念艦は必ず博物館を併設し当時の実情を忠実に再現・保存しており、歴史的事実を正確に伝えるという点から「三笠」は大きく遅れている。

戦争や軍事知識に欠け「三笠」の主機がレシプロであったと言われても、また、当時はハンモックに寝ていたとの説明を受けても、実物を見て、また実物に触れて初めて理解できるのである。戦争や軍隊を全く知らない世代が増えつつある今日、忠実に往時の姿・事実を伝え正しい理解が得られるようにすることを、この受賞を機会に真剣に考えるべきではないであろうか。

また、この機会に考えるべきことは諸外国では前述のとおり記念艦を

忠実に復元し保存するだけでなく、必ず記念艦に付属した記念館または博物館を併設し、海軍の歴史的発展を忠実に、また極めて学術的に展示している。

また、戦闘日誌、戦闘報告、指揮官や乗員の手記、関連する公文書や内外の出版物を集め、それを学者や研究家の閲覧に供していた。

当時の新聞や雑誌を見ることによって、当時の日本がいかに大國ロシアに脅威を感じ、「此一戦」がいかに日本の存亡にかかわっていたか。また、いかに世界の国々が日本に同情を寄せていたかなどの正しい歴史が理解できるのである。

「三笠」も日本海海戦や日露戦争、あるいはさらに帝國海軍に関するあらゆる文書資料・出版物などを保管する文書室を併設し、研究者の閲覧に供するなどの便を図り、正しい事実の保管、周知に努められることを

訴えるものである。

さらに外国の記念館には博士号や修士号をもった学芸員が配置され、展示物や収集資料を学術的に評価するだけでなく、海軍思想や国防思想の普及のために、講演会や映画会を行うほか、「海軍史研究会」などを結成し、質の高い会報を発行するなど、その活動は多彩である。

かつて「海軍は日本の文化遺産」といわれた。この海軍の文化や伝統を国民に正しく継承し、真実の歴史を残すために、これを機会に「海軍と明治の文明開化」「横須賀と海軍」「海軍技術と近代日本」などの文化講座や、時には日本海海戦のシンポジウムなどを開催し「日本海海戦の世界史的意義」「東郷元帥の功罪」など多角的な、また広範な文化的活動を推進し、広く国民を啓蒙すべきではないであろうか。

本年から教科書に東郷元帥が登場

したが、問題は教えるべき教師が戦後の教育しか受けていないため、日本海海戦の世界史的意義、「T字戦法」の海軍戦術的意義、さらに日本史上の意義など、いかに東郷元帥を教えてよいのかを知らされていないのである。

このような時代の中にあつて、「三笠」が広範な文化的活動を通じて正しい歴史観、国防観を国民に啓蒙することを、この受賞を機会に真剣に考慮すべきではないであろうか。

(おわり)

(防衛大学校教授)

